

ゴットシェートとアーデルングの間

清 水 朗

0 問題提起

J.Ch. ゴットシェート (1700-1766) と J.Ch. アーデルング (1732-1806) はドイツ語史上、18世紀に活動し、周囲に少なからぬ影響を及ぼした二大文法家であるとされる。そして二人は、J.グリムを中心とした「歴史言語学」が登場し、言語学における大きなパラダイムの転換が起こる以前の「規範文法家」として位置付けられることが多い。

確かに一面、ゴットシェートとアーデルングは当時のマイセン方言 (Meißnisch) あるいは上部ザクセン方言 (Obersächsisch) を「高められたドイツ語 (Hochdeutsch)」の基盤とし、さらに「教養ある (gelehrt)」、「品の良い (gesittet)」といった用語を多用している点で一見大きな共通点をもっていると言える。また18世紀後半に活躍したアーデルングが、16世紀以来の「規範文法」の到達点と見なされることもゆえのないことではない。

しかしながらこの両者の間¹⁾には一見した共通性とは裏腹に、大きな差異も存在していると考えられる。それは例えば同一あるいは類似の語彙を使用しながらも、その意味するところが一前後の文脈をも考慮すると一多かれ少なかれ異なっていることに現れている。これは言語学上のパラダイムの転換とまでは言えないかも知れないが、少なくともゴットシェートからアーデルングに至るまでに「国民」や「外部」に対する視線が変化してきていることを示すものだと思われる。

本論文は両者における言語学上・社会学上のキーワードを比較吟味することで、18世紀のドイツに起こった対外観の変遷の一端を捉えようとするものである。²⁾

1 ドイツ語史の流れの中での18世紀

ドイツ語の歴史は、最近では古高ドイツ語時代(750-1050年頃)、中高ドイツ語時代(1050-1350年頃)、初期新高ドイツ語時代(1350-1650年頃)、新高ドイツ語時代(1650年以降)に四区分されることが多いが、ドイツ語文法の記述が始まったのは16世紀前半であり、このシェーマに従えば初期新高ドイツ語の時代にあっている。ただし、初期の文法記述は「読み書き入門」という実用書的なものや、教養人を対象としたラテン語での著作であり、「ドイツ語はこうあるべきだ」という言語純化・言語規制の意図をもったいわゆる「規範文法」が現れるのは17世紀前半のことである。この時代にイタリア・フィレンツェの「糠の会(アカデミア・デッラ・クルスカ)」に範を取った様々な言語協会がドイツにも設立され始める。そして「規範文法」の流れは18世紀の後半まで続き、その大成者がアーデルングとされていることは先に述べた通りである。特にアーデルングの辞書³⁾はゲーテやシラーなどの大作家にも信頼され、使用されていた事実は広く知られている。

19世紀に入ると、J. グリムを開祖とした歴史言語学が登場し、「科学」としての言語学がうちだされるとともに、研究の対象の中心は以前の共時的なものから通時的なものへと変わってゆく⁴⁾。そしてこの歴史的言語研究は19世紀後半のH. パウルを中心とした「青年少壮学派(Junggrammatiker)」へと継承され、20世紀初頭のスイス人F. de ソジュールによる「構造主義言語学」の提唱によって再び言語学の興味の中心が共時的なものになるまで、通時的研究は言語学の主流であり続けた。

こうして見ると、18世紀以前の言語学あるいは言語観察とは19世紀以後の「科学」としての言語学以前の、前近代的とすら言える言語規則に関する識見のバリエーションに過ぎないと考えられそうであるが、18世紀に時期を限定して考えてみただけでも、実はそこには大きな流れの変化があったと筆者は考えるのである。それは具体的には何なのかを以下に考察することにしたい。

2 ゴットシェートとアーデルングのドイツ（語）に関する共通語彙

ゴットシェートとアーデルングは上述のように18世紀の前半と後半をそれぞれ代表する規範文法家であり、「学識ある」や「上品な」といった両者に共通して使われる語彙も多い。それらをあらかじめとり出して列挙すれば、Volk（民衆、民族、国民）、Nation（国家、国民）、Hochdeutsch（高められたドイツ語、ドイツ標準語）、Muttersprache（母語）、die deutsche Sprache（ドイツ語）などドイツ内に関するもののほか、ドイツの外部に対する表現としては、Italien（イタリア）、italienisch（イタリアの）、französisch（フランスの）といったものが挙げられる。これらはしかし両者にとって同様の意味合いを持つとは必ずしも言えない。ではその差異はどこにあるかをまず見てみることにしよう。

2-a) Volk

Volk という言葉はドイツ人の精神史における一つの重要なキーワードであり、グリムのドイツ語辞典でも実に17段落に亘る記述がなされている⁵⁾。その語義は「民衆、民族、国民」など多岐に亘り、それゆえの難解さ・曖昧さがこの語の理解を複雑にしていることは否めない。

全体としてゴットシェートはこの語を「ドイツ人全体」を表すために用いている場合が多く、それ以外でも古代イスラエルの民を Moses の Volk と呼んだり、民族単位で „gesittete Völker“⁶⁾ と呼んだりしている。また、古代ゲルマンの諸民族を „die wildesten Völker“⁷⁾、あるいは „die barbarischen deutschen Völker“⁸⁾ などと否定的に表している点も注目されるだろう。

これに対してアーデルングは古代ゲルマン諸民族を表す際には „Völkerschaften“⁹⁾ という、筆者の調べた限りではゴットシェートには見当たらない語彙を用いており、Volk という語は、ドイツ人の中の「民衆」という色合いで用いられることが多い。例えば「総ての低劣な、民衆にのみ固有の言葉 (alle niedrige, bloß dem Volke eigene Wörter)」¹⁰⁾ や「無知な大衆 (das unwisende Volk)」¹¹⁾ といった用法は典型的なケースといえよう。つまりアーデルン

グはゴットシェートのように民族を区別するためではなく、ドイツ人内での階層区別のためにこの語を用いていることが多いのである。

2-b) Nation

Nation という語はドイツ語にとっては外来語であり、ラテン語 *natio* (生まれる) に由来していることは良く知られている事実であり、Staat が利益共同体的なゲゼルシャフトを表すのに対し、Nation は出生に基く、血縁共同体としてのゲマインシャフトを表わしている。日本語では「民族、国民」と訳されることが多く、その意味で 2-a) の Volk と重なり合う部分が多い。

ゴットシェートはこの語を普通「ドイツ人全体」、「ドイツ国民全体」を表すために用いており、その意味で Volk との意味の差はさほど感じられない。

それに対しアーデルングでは、この語がさらに他の語と結びついて現れ、「国民」内の階層が表現される場合が多い。例を挙げれば「国民の中で最も学識あり最も品の良い人々 (des gelehrtesten und gesittesten Theiles der Nation)」¹²⁾、「ドイツの総ての教養あり品の良い人々の宮廷語 (die Hofsprache des ganzen gelehrten und gesitteten Deutschlands)」¹³⁾ などであるが、ここでは「ドイツ国民」そのものというよりその中の一定階層 (つまり「教養あり (gelehrt)」、「品の良い (gesittet)」人々) に重点が置かれているのは明らかである。

ただし、ゴットシェートが *gesittet* といった語彙を全く用いないわけではない。ただその場合でも民族単位で「品の良い諸族 (*gesittete Völker*)」¹⁴⁾ などのまきに前述の「野蛮なドイツの諸族 (*die barbarischen deutschen Völker*)」などの対として用いられている点に注意すべきであり、前述 Volk と同様、アーデルングのように社会階層微分的な文脈でこの語が使われているわけではない。

2-c) Hochdeutsch

Hochdeutsch (「高められたドイツ語」) という語を現在のいわゆる Oberdeutsch (「上部ドイツ語」) とは異なった意味で始めて用いたのは17世紀前半の M. オーピッツであるとされるが、この語はゴットシェート、アーデルングの両

者で好んで用いられている。その際、規範とされていたものは（中世南部の共通ドイツ語 *Gemeindeutsch* と多少の折り合いをつけた）マイセン方言あるいは上部ザクセン方言だったとされるのが定説である。

ゴットシェートは「真の高められたドイツ語の書記法 (*die wahre hochdeutsche Schreibart*)」¹⁵⁾ に言及し、フランケン方言 (*fränkisch*)、シュヴァーベン方言 (*schwäbisch*)、バイエルン方言 (*bayerisch*)、オーストリア方言 (*österreichisch*) が上部および低地ザクセン方言 (*Ober- und Niedersächsisch*) 並びにシュレーゼン (*Schlesien*) 方言の正しいあり方と比較されている。他にも、マイセンを「高められたドイツ語の真の所在地 (*der rechte Sitz der hochdeutschen Mundart*)」¹⁶⁾ としたり、「真の高められたドイツ語 (*die wahre hochdeutsche Mundart*)」¹⁷⁾ といった表現を用いている。

アーデルングは彼のドイツ語辞典を „*Grammatisches-kritisches Wörterbuch der Hochdeutschen Mundart*“ (下線部筆者) とし、「高められたドイツ語」が実際にドイツ人の一部の人々の間で用いられていることを強調するとともに、「高められたドイツ語の言語使用 (*dem hochdeutschen Sprachgebrauch*)」¹⁸⁾、「現在の高められたドイツ語の言語使用 (*dem gegenwärtigen Hochdeutschen Sprachgebrauch*)」¹⁹⁾、「良き高められたドイツ語で (*im guten Hochdeutsch*)」²⁰⁾、「高められたドイツ語あるいは支配的な書き言葉 (*die Hochdeutsche oder herrschende Schriftsprache*)」²¹⁾ などの用例があり、ゴットシェートとの差異は一見希薄なものの、現実中存在する *Hochdeutsch* への確信が強まっていることは、その „*Hochdeutsche Mundart*“ (下線部筆者) という語法からうかがえるのである。

2-d) その他の両者に共通するドイツ (語) 関連の語彙

上述の語彙の他にもゴットシェートとアーデルングには「ドイツ語 (*die deutsche Sprache*)」、「母語 (*Muttersprache*)」などの共通に使用されている言葉があるが、語義上の目立った差異はなく、特筆するすすれば、ゴットシェートが中世のカトリック僧侶のもとでは「すべての野蛮なラテン語 (*allen barbari-*

schen Lateine)』²²⁾と同様にルターのドイツ語も粗野であったとしながらも彼は弁論術 (Beredsamkeit) の分野で奇跡を成し遂げたとしている点であろう。しかしながら近代のドイツ語文法家の大部分がそうであったように、ゴットシェートもアーデルングもプロテスタントであったため、この反聖職者的 (antiklerikal) と呼べる姿勢は両者に共通するものだったと考えてよいだろう。

3 ドイツ (語) に関してゴットシェートとアーデルングで異なる語彙

前章ではゴットシェートとアーデルングに共通して現れながらも、多かれ少なかれそのニュアンスが異なっていると思われる語彙をとりあげたが、本章ではそのどちらかにしか現れない語を考察したい。このことにより、両者の言語観・国家間の違いの根本が浮き彫りにされるのではないかと考えるからである。

3-a) Vaterland

ゴットシェートは Vaterland という語を数回使っているが、当時彼が在住していたザクセン地方に対し、生まれ故郷としてのプロイセンをそう呼んでいる場合と、ドイツ全体をそう呼んでいる場合がある²³⁾。前者の用例は国民国家以前の愛郷心の現われとも見なせようが、アーデルングには少なくとも筆者の調べた限りでは Vaterland という語は現れない。だがしかし、ゴットシェートの後者の用例 (つまりドイツ全体を表す) も19世紀的な国民国家という額面どおりには必ずしも受け取れない。彼は他の場所で「バーゼルの愛国者 (Patriot in Basel; Immanuel Wolleb のこと)」²⁴⁾ や「我々のチューリヒの同郷人達 (unsere Landsleute von Zürich)」²⁵⁾ という表現を用いているからである。18世紀に現在のオーストリアが Deutschland (= 神聖ローマ帝国) の一部であると意識されていたことは理解できるが、17世紀前半の30年戦争後にすでに自律的な国家となっていたスイスの人々をも「愛国者」、「同郷人」と呼んでいることは意外な気持ちを起こさせる。ゴットシェートの理解ではドイツ語を話すものは総て「同郷人」とされたのだろうか。

3-b) Geschmack

Waterland とは対照的にアーデルングに頻出し、ゴットシェートには殆ど見当たらない語彙として「趣味 (Geschmack)」が挙げられる。アーデルングがこの語を用いているのは大抵「高められたドイツ語 (Hochdeutsch)」との関連で、「学識 (Gelehrsamkeit)」「諸学問 (Wissenschaften)」などの語と併用されている場合である。典型的な例を引用しておけば、「良き趣味が高められたドイツ語を他の総てのドイツ語から高みへと引き上げたのだ (der gute Geschmack hat die Hochdeutsche Mundart aus allen übrigen heraus gehoben)」²⁶⁾ などである。ゴットシェートにこの語が現れないのは、彼の活動した18世紀全般においてはドイツ人の自らの母語の状態に対する自意識がまださほど高くなかったからなのかもしれない。

4 「外部」に対する語とゴットシェートとアーデルングの見解

ここまでは主にゴットシェートとアーデルングのドイツ人・ドイツ国に対する見解の違いを見てきた。全体としては、使用語彙に共通のものはあるものの、その使われ方が微妙に——つまりゴットシェートでは前国民国家的な意識がまだ残ると同時に、Volk という用語をアーデルングのように国内階級区別的ではなく、民族間区別的に用いられている傾向など——異なっていることを指摘した。

本章では両者の「外部」に対する見解がいかに異なっているかを、上で考察したことも関連させ論じたい。ここで「外部」と呼ぶのは、同時代あるいは17世紀以前に遡る、主にラテン語・イタリア語・フランス語で著述された著作とその思想内容を指している。学問の言語としてのラテン語は18世紀にはまだ非常なブレステージを有していたし、ドイツ人がそれ以外に頻繁に学習していた俗語・外国語は主にフランス語とイタリア語であったからである。本章ではしかし、特に18世紀当時におけるドイツ人のイタリア観・フランス観を中心に考察することにする。

4-a) italienisch, französisch

「イタリアの」・「フランスの」を表す形容詞および名詞は今日では一般に *italienisch-Italien, französisch-Frankreich* であり、ゴットシェート、アーデルングの両者ともそれらの語を用いている。ただしゴットシェートはフランスの「物書きたち (Scribenten)」²⁷⁾ は「雄弁術 (Wohlrredenheit)」²⁸⁾ の模範であるし、またイタリアも中世における「野蛮な諸民族 (die wildesten Völker) (= ドイツ人)」²⁹⁾ とは逆に自由学芸の花咲いた場所であり、ドイツ人との比較の対象としても „Italiener, Franzose, Engländer, Alte“ と他民族を凌いで第一位に挙げられているのである。それに対してアーデルングはフランスの宮廷語は最初は(ドイツ語の)フランク方言であった点を指摘し、その後「ラテン語と古い土着語から (aus der Lateinischen und alten Landessprache)」³⁰⁾ なった言葉がフランスの宮廷語および書語として採用された、と否定的と取れる表現をしている。さらにイタリアではドイツ人はその東方貿易から利益を得ることができたものの、バルト海経由で独自の北国との貿易を展開した、といった、むしろドイツ人の自律性に関する記述が見られる。さらには神聖ローマ帝国下におけるシュタウフェン朝によるイタリアでの戦いや、趣味に関する「イタリア人たちの装飾過剰 (dem italienischen Schwulste)」³¹⁾ などが取り上げられ、肯定的な評価は殆ど見られないのである。

4-b) welsch, Welschland

italienisch, französisch とともにドイツ人の対外観を表す言葉に *welsch* (イタリアあるいはフランスの、より広くはロマンス語地域一般の)、およびその人々の住む国を指し示す *Welschland* がある。この言葉は中世以来特にイタリア・フランスを指すことが多く、17世紀以前にはむしろイタリアを意味し、19世紀のナポレオンに対する解放戦争時代にはフランスの意で用いられることが多かったという³²⁾。この言葉には軽蔑的な意味が含まれることが多いと指摘もされるが、必ずしもそうした用例ばかりが見つかるわけではない。

ゴットシェートでは *Welschland* (ここではイタリアの意) のペトラルカのも

とでイタリア人は「良き趣味 (guter Geschmack)」³³⁾ を取り戻したとされ、諸外国人を列挙する場合に「Wälschen, Franzosen, Engländern (イタリア人、フランス人、イギリス人)」³⁴⁾ と第一に挙げられている例があるが、これらには Welschland, Welschen に対する肯定的な評価こそあれ、軽蔑的な色合いは全くないといってよいだろう。

これに対してアーデルンクには Welsch(land) という言葉自体が彼の辞書の「前書き (Vorrede)」や „Umständliches Lehrgebäude“ の序章の部分には全く現れない。これは welsch という言葉のもつ対外的な畏怖観・尊敬観が少なくともイタリアに対してはもう感じられない、その意味で同時代のイタリア文化に対する評価の低下と関係しているのではなからうか³⁵⁾。イタリアが文化上の畏怖・尊敬の対象としての地位から降りるや否や、18世紀後半の J.W. ゲーテをその典型とする、オリエンタリズムの視線の対象となっていくのである³⁶⁾。

ごく少ない例から断定的な結論を下すわけにもいかないが、実はこの welsch, Welschland の使用及び使用法こそが、18世紀前半のゴットシェートと後半のアーデルンクの基本的な「外部」に対する姿勢の違いを表しているように筆者には思われるのである。18世紀前半まで文化の規範として圧倒的な力を誇っていたイタリアは、ゴットシェートに welsch と表現されることにより、その存在を認められていたのではなかったのか、それにたいし、18世紀後半になるとイタリアに対する視線は、古代にはその威容を誇っていたものの、同時代のイタリア人・イタリア文化は取るに足らないものとする、「オリエンタリズム」的なものになっていったのではないか。まさにこの意味で welsch という語は、それが用いられる際にすでに、より neutral な italienisch, französisch といった場合とは異なる、独特の含意をもつものと言ってよい。

4-c) römischkatholisch

ゴットシェートに一例が見出された römischkatholisch³⁷⁾ という語は、welsch や italienisch とは異なり、明らかにネガティブな意味で用いられている。上述のように、17～18世紀の規範文法家達は大多数がドイツ北部出身のプロテス

タントであったため、ここにも明白な反聖職者主義 (Antiklerikalismus) が見て取れるだろう。つまり、ゴットシェートはイタリアの文芸を顕揚する反面、宗教的には反ローマ的な姿勢を決して崩さないのである。このことから、前項で扱った *welsch* という語および観念と、宗教的な観念は二つの異なった位相において——二つの異なった軸上での「外部」への姿勢として——捉えられねばならないと言える。宗教的要素はそれとして複雑な問題をはらんでいるためここではこれ以上深入りはしないが、中世以来 (特にシュタウフェン朝時代) にドイツとローマの信仰的あるいは政治的対立があったことは付け加えておいて良いだろう。

5 その他の語彙

以上に挙げた語彙の他に二人が用いている語彙としては *Pöbel* (賤民; ゴットシェートは単に *der Pöbel*,³⁸⁾ アーデルングは「賤民の言葉 (die Sprache des Pöbels)」³⁹⁾、言語の文体を表すのに「4. 低俗な、そして 5. 全く賤民的な (4. niedrige, und 5. die ganz pöbelhafte)」⁴⁰⁾ という表現を用いている) が挙げられる。現代語で *Pöbel* は明らかに差別語であり、まず用いられることはないと思うが、18世紀という民主主義以前の社会の教養人にとっては使用することに全く抵抗がなかったように見える。これは両者に共通する時代傾向の反映と見ることができるだろう。

その他にアーデルングの「最も古いシュヴァーベンの詩人達 (die ältesten schwäbischen Dichter)」⁴¹⁾ という表現があるが、ここでいう „schwäbisch“ とは中高ドイツ語時代のハルトマンやヴォルフラムの使った言語を意味しており、事実上 (広義の) アレマニアやシュタウフェン朝を意味していると考えてよい。ここでも前述した中世以来のドイツーローマの対立が反映している可能性がある。

6 ゴットシェートとアーデルングにおける「内部」と「外部」

これまで様々な両者の用いる語彙をもとに、ゴットシェートとアーデルグの差異を明らかにしようとしてきた。しかし、全般的なイメージを通して感じられるかもしれないように、この論文はアーデルングを断罪し、ゴットシェートを顕揚

するためのものではない。そうではなく、この両者のあいたに一つの歴史的な転換があったことを確認するのがこの論文の主要論点であったのである。それは個別的に言うとうどういうことか。それは、「清く正しきドイツ語」といった観念が18世紀以降ドイツに定着し、皆がそれに従おうとし、それによって、バイエルン・シュヴァーベンなどの方言が従属的地位に貶められてしまったことを意味する。マイセン・上部ザクセン方言をドイツ語の主流としたのはゴットシェートであるが、それを具体的な政治路線として定着させたのはアーデルングであったのだ。そしてそれに応じて一般出版界はそれに範を取ろうとし始める。前述のようにゲーテ、シラーといった大作家達がアーデルングの辞書に頼り始めるとなれば、これは当然のことともいえよう。しかしこうした表面上のドイツ語の標準化の下部では大きなマグマの変動とも呼べるべきものが起こっていたのではない。つまりは南部・イタリアへの視線の根源的な変化が、イタリアは古代ローマ時代からギリシアとともに学芸の規範であり、その価値をルネッサンスを経て17世紀までのドイツ人に対して保っていたと言える。しかし、典型的にゲーテに見られるイタリアはほぼ古典古代にその興味を集約され、ルネッサンスおよび同時代への興味はほぼ引き起こされていない。

この「内部」と「外部」に対する視点の変更が（無意識的に）ゴットシェートとアーデルングの著述にも反映されているのではないだろうか。卓越した文法家達も時代の趨勢から無縁でいることはできなかったのである。

7 ドイツ語史全体に対する18世紀の位置 ——結語——

以上の考察より、ドイツ語史全体の中での18世紀の位置付けも考慮し直す余地があるのではないかと思われる。勿論、本論での考察の範囲はごく限られたものであって、総合的に考えれば例えば文芸史上における啓蒙主義などが視野に入れられねばならないことは言うを待たない。しかしこの小論考から言えることは、ドイツ語史に限ってみれば19世紀の「歴史言語学」によるパラダイムの転換⁴²⁾が起こる以前にそれよりも深い場所で「ドイツ」の「外部」に対する姿勢が変わっていたのではないか、ということである。それは例えばイタリアに対する

welsch 的な視点からのオリエンタリズムの視点への転換ということもできるだろう。また、さらにそれは大局的には前国民国家的観念から国民国家意識の誕生を意味し、19世紀以後のドイツ帝国主義を徐々に準備しつつあるものだったかもしれない。それをどう名付けるかは様々でありえるにせよ、この分岐点を無視することはできないのであり、ドイツ語史的な観点にここで戻れば16~18世紀=規範文法、19世紀=歴史言語学といった従来の図式が部分的にも変更される余地があるのではないか、ということなのである。

(了)

- 1) ゴットシェートとアーデルングの間には、C.H. アイヒンガー (1717-1782), J.S. V. ポボヴィッチュ (1705-1774), H. ブラウン (1732-1792) などの文法家がいるが、彼らについてはこの論文では触れないこととする。
- 2) 筆者が本論文で参照したのは以下の著作である：(ゴットシェートの著作) Ausführliche Redekunst, Leipzig 1736 (以下 AR とする)；Versuch einer Critischen Dichtkunst, Leipzig 1742 (以下 CD とする)；Beobachtungen über Gebrauch und Misbrauch vieler deutscher Wörter und Redensarten, Straßburg/Leipzig 1758 (以下 BG とする)；Vollständigere und Neuerläuterte Deutsche Sprachkunst, Leipzig 1762 (以下 DS とする)；(アーデルングの著作) Umständliches Lehrgebäude der Deutschen Sprache. Bd.I, Leipzig 1782 (以下 UL とする)；Grammatisch-kritisches Wörterbuch der Hochdeutschen Mundart, Leipzig 1793 (以下 HM とする)。
- 3) 前掲の HM をさす。
- 4) J. グリムにおける言語観・民族観については拙稿 『ヤーコプ・グリムにおける「文献学」と「フォルク」』(『エネルゲイア』第24号, 1999年, 63~82頁)を参照されたい。
- 5) Vgl. DWB Bd.26, bearbeitet von Rudolf Meiszner, Leipzig 1951, Sp.454-471.
- 6) AR S.7.
- 7) AR S.19.
- 8) AR S.18.
- 9) UL S.15.
- 10) HM S.III.
- 11) UL S.62.
- 12) UL S.64.

- 13) UL S.61.
- 14) AR S.7.
- 15) DS S.70.
- 16) BG S.16.
- 17) HM S.III.
- 18) UL S.XXIIf. (Anm.) .
- 19) UL S.XXXI (Anm.) .
- 20) UL S.XXXIII.
- 21) UL S.84.
- 22) AR S.21.
- 23) 前者の例は AR S.IV, V, XI, 後者の例は AR S.XVII.
- 24) BG S.3.
- 25) CD S.26.
- 26) UL S.89.
- 27) AR S.28.
- 28) AR S.28.
- 29) AR S.19.
- 30) UL S.43.
- 31) UL S.70.
- 32) Vgl. DWB Bd.27, bearbeitet von Karl von Bahder, Lipzig 1922, Sp.1327-1354.
- 33) AR S.20f.
- 34) DS S.13
- 35) Welsch という語へのドイツ人達のもつ語感については、拙稿『「ドイツ」とその「外部」——中世から近代へかけて welsch の意味変遷との関連において——』（『一橋論叢』第124巻，2000年，482-494頁）を参照されたい。
- 36) 前掲論文490頁以降参照。
- 37) BG S.20.
- 38) DS S.19
- 39) UL S.71
- 40) H. Henne, Einführung und Bibliographie zu J.Ch.Adelung (Neuedruckt in : Deutsche Wörterbücher des 17. und 18. Jahrhunderts. Einführung und Bibliographie, hrsg. von H. Henne, Hildesheim/Zürich/New York 2001, S.145-178), S.151.
- 41) UL S.52.
- 42) M. Foucault 流に言えば *grammaire générale* から *philologie* への転換である

(48) 一橋論叢 第129巻 第3号 平成15年(2003年)3月号

(M. Foucault, *Les mots et les choses*, Paris 1966, p.292 et suiv.).

(一橋大学大学院法学研究科教授)